m のメニ村から 2,000 m のアルファック山までを中心に 10 日間の調査でした．もちろん，高桑さんと私の目的は甲虫類でしたが，あなたはトンボを見かけると苅部さんの顔を思い出すらしく，懸命に走って追いかけていましたね．そのため，切り株につまずいて足を怪我し，激痛をこらえながら「採ったぞ！」と叫んでいました．あなたは，えらい！あなたも私も酒好きなのに，イスラムの世界では禁酒．10 日間山にこもっている間は二人とも一滴も飲まなかったのに，どうにか耐えられました．山から下りてやっと缶ビールを手にした二人，「ぼくたち，アル中ではなかったね」と乾杯したのを覚えていますか．

格好いい甲虫，たくさんの友人たち，それにお酒．楽しい人生でしたね．

（横浜国立大学名誉教授，元神奈川県立生命の星・地球博物館館長）

高桑さんはいつも仲間と一緒だった

伊藤 弥寿彦

高桑さんに初めて出会ったのはボクが小学 5 年生（10 歳）の時で，生涯忘れられぬその時の思い出は，月刊むし 417 号（2005 年 11 月・カミキリ特集号）の今月のむし「オニホソコバネカミキリ」に書いた．他にも高桑さんとの思い出を書いたことはあって，それは彼の周りにいた多くの虫屋さんも同じだと思う．2008 年に還暦の記念として刊行された「高桑正敏の解体虫書」という珍本があるからだ．この世の物とは思えぬハデトラ（ミイロトラ）カミキリの格調高い絵で飾られた表紙の本の中で，沢山の人が高桑さんとの思い出を語っている．実際この本を見れば，高桑さんの虫屋人生の全てがわかってしまう．高桑さんは多くの方々に愛された昆虫界のスーパースターだが，それにしても生前に仲間によってこんな本が作られてしまった虫屋というのは空前絶後のことだろう．この見事な「解体虫書」を企画したのは「華飲み会」と銘打った虫仲間で，その中心は藤田宏さん，苅部治紀さん，中村進一さん，丸山清さんだった．高桑さんは人垂らしで，同時に良き後輩に恵まれている方だった．特に藤田さんという存在は決定的だった，と思う．ボクは子供の頃から二人を眺めていたが，それは心

写真1．1976年牛歩会．

写真2．1978年木曜サロン．

写真3．夢虫の会採集会の高桑さん．

写真4．弥彦山のコブヤハズカミキリ．

底うらやましく思える師弟（兄弟？）関係に見えた．月刊むし誌上でしばしば掲載されたエッセイで，高桑さんによる藤田さんと，藤田さんによる高桑さんの描写や掛け合いは，下手な漫才よりもよほど面白くて，いつも爆笑したものだった．そもそもこの二人がいなければ，日本鞘翅学会（＝日本鞘翅目学会）だって無かったし，「Elytra」も「さやばね」も存在しなかったのだ．

「牛歩会」というカミキリニュース主催の採集会があった．1976 年の第 2 回牛歩会は，カミキリ屋のメッカだった奥日光，群馬県大沢のみよしやで行われた．虫そっちのけのそれこそハチャメチャな会で，中学生のボクには刺激が強すぎた．メチャクチャだったが，みんな仲良しだった．写真はその時，28 歳の高桑さんと 13 歳の私（写真 1）．

ここにもう一つあげた写真は 1978 年の木曜サロン忘年会の一コマである．毎週木曜日に上野の加賀という喫茶店で開かれていた甲虫屋の集まりで，あのミイロトラが世界で初めて世間？にお披露目されたのもこの場所だった．忘年会の席上で高桑さんの右隣にいるのは 1981 年に若くして世を去った高桑さんの盟友（麻雀チンチロリン仲間）で採集の天才だった小田義広さんだ（写真 2, 左から小宮次郎さん，露木繁雄さん，高桑さん，小田さん，小林敏男さん）．

ボクは 1980 年代に渡米したので虫屋さんたちとのつきあいがしばらく途絶えたが，2000 年に新堀豊彦さんを囲む虫仲間の集まりである「夢虫の会」に仲間入りさせていただき，再び高桑さんとの楽しいつきあいが始まった．夢中の会を牽引しているのはやっぱり高桑さんだった（写真 3）．

2011 年，明治神宮の境内総合調査に委員として高桑さんに加わっていただいたことはボクの誇りである．調査の様子を映像で記録した時，高桑さんには絶対に作品に登場して欲しかったので，調査初日にインタビューをした．短い時間ではあるが，2015 年に放送された NHK スペシャル「明治神宮　不思議の森」に高桑さんを登場させられたことはディレクターのボクにとっての喜びだった．でも結果的に明治神宮の番組が，恐らく高桑さんがテレビ映像に登場する最後の姿になってしまった．

8 月の終わり，夕暮れの茜色に染まる晩夏の雲を呆然と眺めながら，金沢八景からモノレールに乗って高桑さんがいる病院へ向かった．ベッドの上の高桑さんは恐らく薬のせいで少し朦朧としてはいたけれど，会話はちゃんと成立していたし，別れ際に握った手は本当に力強くて，ボクはもう一度，絶対に高桑さんは復活してくれると妙な確信をもったのだ．でも願いは叶わず，そのわずか 5 日後に，我が師匠，高桑正敏さんは愛するご家族と多くの仲間を残して逝ってしまった．

高桑さんが旅立った後，ボクは新潟の弥彦神社へ参拝に行って，奥宮のある弥彦山の山頂へケーブルカーで上がった．山頂駅から奥宮への尾根筋はいかにもコブヤハズカミキリ好みの枯れたウドが点在していた．弥彦山のコブヤハズ・・・それは高桑さんが 1971 年の甲虫ニュース No.14 と月刊むし 9 号に報告していて，ボクの中ではこれがコブ博士，高桑さん初のコブレポートだと思っている．弥彦山の山頂部でウドの枯れ葉にちょこんと乗った，少し変わった大きな斑紋を持つコブヤハズを目にした瞬間，にこやかな高桑正敏さんの笑顔が弥寿彦の瞼の裏に浮かんだ．全然論理的ではないのだけれど，その時なぜか，ボクは高桑さんへの一つの供養をはたしたような気がした（写真 4）．

（東京都品川区）

高桑さんとの思い出

大原昌宏

私が高桑さんと初めて会ったのは，高校生の時，科博の新宿分館で行われた甲虫談話会の席だった．遠い親戚にあたる遠藤俊次さんに黒沢良彦先生を紹介していただき，先生から談話会への入会を勧めていただいた．緊張しながら出席した初めての会は，発表内容も参加者も忘れてしまったが，黒沢先生と長竿を背負っていた高桑さんは覚えている．1978 年のことである．その後，私は鹿児島大学，北海道大学と進学し，東京を離れたため，高桑さんと再び会うのは大学院生になり甲虫学会（当時は鞘翅目学会）に毎年出席するようになってからである．

環境省の「絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会」の前任委員だった上野俊一，森本桂，佐藤正孝の先生方に代り，1995 年から，高桑さんと私が甲虫担当の委員となった．これ以降，年に 2，3 回，委員会や学会で高桑さんにお会いするようになった．高桑さんは既に神奈川県や東京都のレッドデータブック（RDB）種の選定委員などを経験されており，保全活動にも積極的に関わっておられたことから，環境省の甲虫類 RDB 種選定で